

研究科・専攻名

文学研究科史学専攻

教育課程・学習成果の検証

1. 研究科・専攻の教育課程について、院生の履修状況に対して開講科目数は適切か、非常勤講師比率は適切か、院生にとって体系的な科目編成となっているか等を検証

【検証結果（全体概要）】

- 博士後期課程に関しては、2020年度は9科目開講した。院生の専門分野に応じて開講科目を適宜調整しており、院生の履修状況に対して適切な開講科目数になっている。2020年度は後期課程では非常勤講師の担当科目はなかった。
- 博士前期課程に関しては、2020年度は86科目が開講された。史学専攻においては、東洋史・西洋史の研究対象が世界の多様な地域にまたがるため、院生の関心を満たすために、ある程度の科目数が必要である。こうした事情を考慮すると、開講科目数が他の研究科・専攻に比べてやや多いことは、開講科目数が適切であり、院生にとって体系的で、充実した科目編成となっていることを示している。前期課程での非常勤講師比率は、2018年度が16.8%であったのに対し、2019年度には21.6%に高まったが、これは、2019年度に他大学に移籍した元専任教員が、引き続き担当したためであり、2020年度には非常勤講師比率は16.5%に低下した。

【成果および向上施策】

- 博士前期課程において、2019年度に他大学に移籍した元専任教員が引き続き担当していた科目を、2020年度には専任教員が担当することになったため、非常勤講師比率を低下させることができた。

【課題および改善施策】

- 2019年度より学部において新カリキュラムが開始されたため、従来、学部と研究科との共通科目としていた科目が、学部3回生配当から2回生配当へ変更された。これを受けて、2021年度からは同科目の共通科目としての設定を廃止し、史学専攻のカリキュラム全体の専門性を、より高めることを目指している。

2. 「大学院生アンケート」(<http://web.kyoto-wu.ac.jp/gakuseki/cat82/20210324132744.html>)等の資料を参考に、研究科・専攻の教育について、効果が挙げられている点、改善すべき点を検証

【検証結果（全体概要）】

- 「大学院生アンケート」の中で、「授業内容」、「履修指導」、「担当教員の熱意」、「研究指導」などの項目は、いずれも、「大変あてはまる」「あてはまる」を合わせた肯定的評価の割合が高く、十分な評価を得ている。
- 「大学院生アンケート」の中で、「ティーチング・アシスタント」については例年と比較して評価が下がったが、これは前期の対面授業がオンライン授業に切り替わり、TAとしての経験や、それに伴う収入がなくなったことに起因した、と考えられる。

【成果および向上施策】

- 「大学院生アンケート」の中で、「時間割編成」「シラバス」は例年よりも評価が高く、オンライン授業への対応ができていたと評価できる。

【課題および改善施策】

- 「大学院生アンケート」回収率が、文学研究科では、2019 年度に比べて 2020 年度は低下した（62.5%→54.2%）ため、その向上を目指す。
- 「大学院アンケート」自由記述欄で、2020 年度はコロナ禍で TA としての経験を積むことが困難であったことを残念とする意見が複数あったことから、その運用のさらなる拡充を目指す。

3. 研究科・専攻として行っている、教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組み（FD）はどのような内容か、どのような課題認識に基づくものか。

【検証結果（全体概要）】

- 毎月 1 回程度、学部教育に関する FD 会議の後、大学院担当教員の間で、大学院生全体の履修状況や進路等の動態について、情報を共有している。さらに、日本史、東洋史、西洋史の各研究分野内でも、担当教員間で、院生の研究の進捗状況を中心に日常的に意見交換を行い、その結果を実際の院生指導に反映させている。

【成果および向上施策】

- 特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】

- 特筆すべき事項なし。

4. 教員組織の編成（採用・昇任等）にあたって、職位構成および年齢構成のバランスに配慮した編成をおこなっているか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。

【検証結果（全体概要）】

- 2020 年度の史学専攻教員の職位構成は、教授が 8 名（うち、男性が 7 名、女性が 1 名）、准教授 4 名（うち、男性が 2 名、女性が 2 名）、講師が 0 名だった。博士前期課程・後期課程の史学専攻全体の視点から見ると、円滑な授業実施・学生指導のために、日本史・東洋史・西洋史の各領域に 2・3 名の教授資格者がいることが不可欠であるため、こうした職位構成は適切である。
- 2020 年度の本学科教員の年齢構成は、60 歳代が 3 名（うち、男性が 3 名）、50 歳代が 4 名（うち、男性が 4 名）、40 歳代が 5 名（うち、男性が 2 名、女性が 3 名）、30 歳代が 0 名だった。
- カリキュラムとの関連については、ポリシーを踏まえ、日本史・東洋史・西洋史で構成されるカリキュラムにおいて、各領域ともに、古代史から近現代史まで各時代を専門とする教員を満遍なく配置しており、カリキュラムと整合した教員組織になっている。

【成果および向上施策】

- 2018 年 11 月に急逝した東洋史担当教員のポストが、2020 年度に 40 歳代の准教授によって埋められたため、職位構成、年齢構成、カリキュラムとの関連のすべてにおいて、適正なバランスが回復された。

【課題および改善施策】

ジェンダー構成の望ましいありようをどのように実現するか、に関して、検討を行う。